秋田魁新報　2021年10月29日付　秋田市

「学校祭で竿燈を」生徒の願いが結実

金足農高 有志が披露、花火と共演も

秋田市の金足農業高校で10月に開かれた学校祭「金農祭」で、初めて生徒らによる竿燈演技が披露された。「学校祭で竿燈を上げたい」―。そんな生徒の思いが実を結んだ。当日の22日は竿燈と共に、恒例の打ち上げ花火も上がり会場を盛り上げた。

自粛の日々…思い出つくりたい

提案したのは、竿燈の差し手経験もある小林里空さん（3年）。新型コロナウイルスの影響で竿燈まつりは2年連続の中止に。金農祭も地域の人を招くことができないなどあらゆる場面で自粛が求められる中、「高校3年間の思い出に残ることがしたい」と考えたという。

「竿燈には幼い頃から関わってきた。中学では差し手も経験した。大好きな竿燈をみんなに見てもらいたい」と小林さん。学校の了承を得て、9月から竿燈披露に向け動いた。

校内でメンバーを募ったところ、差し手経験のある生徒が小林さんを含め4人、土崎港曳山まつりのおはやし経験のある生徒2人、先生1人の計7人が集まった。

10月に入ると、早速練習を開始。週に数回、放課後を利用して秋田市大町にある「ねぶり流し館」で、秋田地区協力雇用主協会竿燈会の指導の下、練習に励んだ。

そして迎えた当日。午後5時すぎになると、校舎前の駐車場に、同竿燈会から借りた大若が登場。軽快なおはやしに合わせて竿燈が立ち上がると、集まった生徒たちは写真を撮ったり、「どっこいしょー どっこいしょ」の掛け声で声援を送ったりしながら眺めていた。

差し手の生徒たちは竿燈を上げながら扇子や傘を広げる技も見せ、会場を沸かせた。継ぎ竹によって竿燈が空高く上がると、それに合わせて次々と花火が打ち上がり、夜空で光の稲穂と花火が共演。地域住民や保護者に披露することはかなわなかったが、集まった生徒や職員を魅了した。

演技後には、会場から大きな拍手が送られた。提案者の小林さんはその場にしゃがみ込み、友人からねぎらいの言葉を掛けられていた。

小林さんは「多くの生徒が集まってくれて、みんなの前で竿燈を上げられたことがうれしくて…。途中で花火も見えて感動して、涙があふれそうになった」と語った。

生徒会担当の川村桃子教諭は「コロナで思うようにやりたいことができない中、生徒たちがやりたいと思った竿燈を実現できたこと、多くの生徒が集まって楽しい時間を共有できたことが本当に良かった」と話した。（冨樫幸恵）

生徒たちが上げた竿燈と花火が夜空を彩った

©秋田魁新報社